

Vol.10

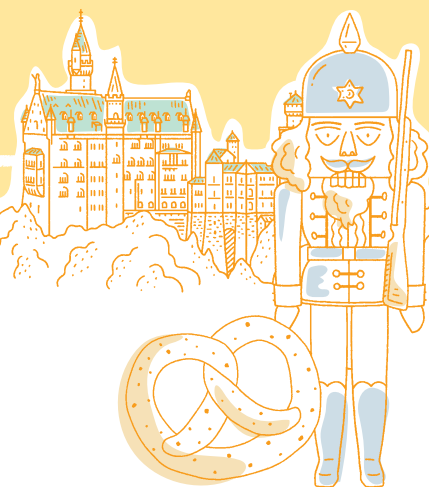
ドイツ



東嶋和子の

Energy満タン!

世界紀行



Vol.10

ドイツ

東嶋和子

Wako Tojima

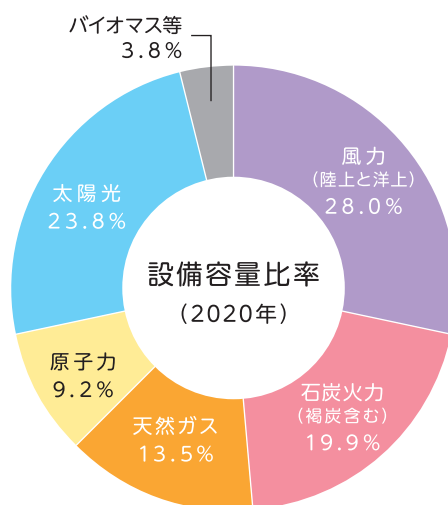
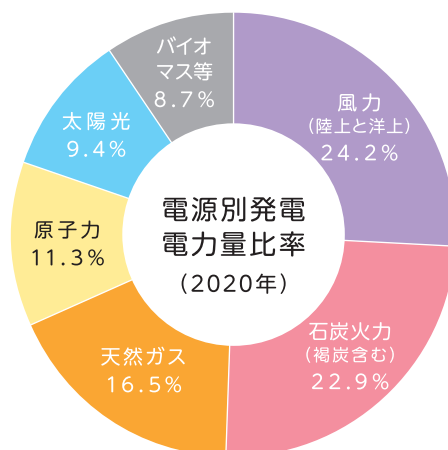
科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師

ロシアによるウクライナ侵攻は、世界のエネルギー情勢にも影を落としています。欧州では、ロシアからドイツ経由で欧州に天然ガスを送るパイプライン「ノルトストリーム1」をめぐる、欧州とロシアとの軋轢が報道されています。

2022年9月2日には、ロシア国営ガスパロムが、パイプラインの点検でオイル漏れが見つかったとして、3日に再開予定だったガス供給の停止を続けると発表しました（読売新聞9月3日付）。ガスパロムは7月にガス供給量を8割減らし、8月末からは供給を止めていました。ドイツ政府はこれを、ロシアへの経済制裁を強める欧州への揺さぶりとしています。ガス需要が高まる冬に向け、ノルウェーからの調達を増やすなどして備蓄を進めようとしています。

ドイツは石炭の豊富な国です。石炭が、ドイツを世界に冠たる工業国にしたといっても過言ではありません。石炭は現在もドイツの主要なエネルギー源の一つです（図）。二酸化炭素排出増加につながるとはいえ、多くの労働者を抱える石炭産業からの脱却は容易ではありません。2020年7月に「脱石炭法案」を可決・成立させたものの、石炭火力の全廃は2038年とかなり先に設定しています。一方、原子力については、段階的廃止政策を進めたり中止したりと、右往左往してきました。

私は仕事でもプライベートでもたびたびドイツに足を運んでいます。写真は、2004年のベルリンマラソン。大会前に足首を捻挫したのですが、他のランナーや沿道の市民に励



電源別発電電力量比率と設備容量比率(2020年)

〈出所〉BDEW, Kapazität und Erzeugung 2020, 2020.12.17
 〈出典〉『世界の原子力発電開発の動向2021』

裏面に続く →



まされ、何とかゴールできた瞬間です。伝統と先進性が共存するベルリンの街並みの美しさは忘れられません。

この当時、ドイツは連邦政府と電力業界とで「脱原子力協定」を結び、一定の運転年数を経た発電所を順次閉鎖するとしていました。原子力に反対する「緑の党」が連立政権に入っていたからです。廃止が決まった発電所のあるシュターデで「原子力賛成」のデモがあったと聞き、2002年、現地に飛びました。

シュターデはドイツの北方、エルベ川に港を開き、ハンザ同盟で栄えた貿易都市ハンブルクから約35キロのところにあります。1970年代、エルベ川沿いにアルミニウム工場やダウ・ケミカルをはじめとする大手化学工場が進出しました。原子力発電所が電気を供給し、人口が増えました。ところが近年、工場が中国に移転する「産業空洞化」が進み、電力需要が減りました。近隣諸国から安い電気を輸入できるようにもなりました。政治に加え、地域経済の要因もあったのです。「緑の党」の町議は、「党としては原子力反対だが、町議としては発電所を存続してほしい」と、本音を語ってくれました。

廃止が決定的になったのは、2011年3月の福島第一原子力発電所事故後です。当時17基で総発電電力量の4分の1を担っていましたが、事故を受けて8基を同年8月に閉鎖、9基は2022年末までにすべて閉鎖することで合意しました。これまでに6基閉鎖され、現在残っているのは3基です。

こうした原子力政策にともなって風力と太陽光を急拡大させた結果、合計設備容量は50%を超えました。ただし、発電電力量は34%程度です。

ウクライナ危機を受けて、ドイツの原子力政策はまた揺れるかもしれません。国民の大多数が、「年末以降も国内に残る原子炉3基の運転継続を明確に支持」しているという世論調査が発表されたのです（原子力産業新聞2022年8月9日付）。

ドイツの公共放送ARDの委託で調査機関が実施した世論調査によると、「3基を年末までに永久閉鎖すべき」とした人は15%。41%は数か月間の運転延長を支持、同じく41%は長期の活用を有益としており、計82%が3基の運転継続に賛成でした。「緑の党」支持者でも「年末までに閉鎖すべき」は31%で、61%が運転延長を支持したそうです。

ここまで書いたところでニュースが飛び込んできました。ドイツ政府は9月5日、稼働中の3基のうち2基について、年末の運転期限以降も運転可能な状態を維持すると発表しました（電気新聞2022年9月7日付）。今冬の電力供給の安定性について検証した結果、需給逼迫に陥る可能性を「現時点では完全に排除できない」として、2基を予備電源として2023年4月中旬まで維持するとしています。ドイツのエネルギー政策の行方から今後も目が離せません。

(2022年 9月)



ベルリンマラソンのゴール

●資料出典

『世界の原子力発電開発の動向 2021』日本原子力産業協会編集発行
『平成30年度国際エネルギー情勢調査（諸外国のエネルギー政策動向及び国際エネルギー統計等調査事業）
諸外国のエネルギー政策動向に関する調査報告書 一 経済産業省資源エネルギー庁委託調査』日本エネルギー経済研究所
『みんなの知らない世界の原子力』海外電力調査会編著、日本電気協会新聞部発行

PROFILE

東嶋和子 とうじまわこ / 科学ジャーナリスト・青山学院大学非常勤講師

筑波大学卒。在学中、米国カンザス大学に文部省交換留学。読売新聞社科学部記者を経て独立。「いのち」をキーワードに科学と社会の関わりを追っている。主な著書に『水も過ぎれば毒になる 新・養生訓』『人体再生に挑む』『放射線利用の基礎知識』『死因事典』など。外務省外交フォーラム外務大臣賞、原子力学会社会・環境部会優秀活動賞受賞

